

特別寄稿

マードックの知性と勇気

麻生えりか

私の手元に、わずか5ページの演説原稿のコピーがある。これは、今から50年余り前、1962年1月15日にロンドンのセントラル・ホールでイギリスの反核団体 CND (Campaign for Nuclear Disarmament, 核兵器撤廃運動) により開催された「女性はなぜかと問いかける (Women Ask

Why)」という集会でのアイリス・マードックの演説原稿である。この時マードックは42歳、1954年のデビュー以来、長編小説を次々と発表し、イギリス文壇を代表する作家としての地位を確立した頃である。

「道徳と爆弾 (Morality and the bomb)」と題さ

れたこの演説の中で、マードックは訴える。核問題を政治や外交の領域に閉じ込めて思考を停止してはいけない。「それ以前のどんな戦争に比べても核戦争は邪悪で無益だ」という、良識ある人間一人一人が感じたはずの道徳的な戦慄を単なる恐怖や憎悪に終わらせることなく、今こそ政治に反映させるべきだ。核戦争が国家の正義を証明することなど絶対にない。核に関する情報公開と教育を普及させ、まずは私たちの手で核兵器を持たないイギリスを実現させよう。人間はどうあるべきか、人間に許されることは何かを考えることで、イギリス人が率先して道徳と政治を結びつけ、核兵器廃墟を先導しようではないか。

人間の良識によって原子爆弾を撤廃しようというこの演説の主旨自体は、現在の私たちから見れば、道徳至上主義に偏った理想論（マードック本人は否定しているが）に聞こえるかも知れない。1958年に設立されたCNDは、イギリスと世界の核兵器全廃、大量破壊兵器の廃止、軍事基地の閉鎖や原子力発電所の閉鎖を求め、イギリスの平和運動を牽引していた。その哲学研究から大きな影響を受けたバートランド・ラッセルが中心となって立ち上げたCNDに賛同したマードックが演説をしたことに不思議はない。

彼女のこの演説の真価は、東西冷戦のさなかの同時代の重苦しい空気の中で声を上げた、その冷静な知性と熱い勇氣にあるだろう。1962年1月といえば、冷戦の緊張が核戦争寸前にまで発展したキューバ危機（10月）を前に、アメリカとソ連の対立がさらに激化していた時期である。イギリスは第二次世界大戦直後から西側諸国の有力メンバーとして、国を挙げて核兵器開発、原発事業推進に邁進していた。世界一の大国の座を完全にアメリカに譲り渡してしまったイギリスにとって、アメリカやソ連と政治的に渡り合うために核兵器は絶対に必要な悪であり、世界で初めて稼働させた民間原発は善以外の何ものでもなかった。そこには、核問題に対する国民のオープンな議論を許す余地は存在しなかったと言っても過言ではない。つまり、核が政治に不可欠なカードになって

いた一方で、マードックの言葉を借りれば「核戦争の極悪非道さが核に対する私たちの思考を麻痺させて」いたのである。マードックの演説には、一部の知識人たちによる反核運動の動機と目的を、広く国民に共有してもらいたいという、彼女の熱意と誠意が込められている。

この演説から25年以上経ち、再び核廃絶運動が盛り上がった80年代においてさえ、マーティン・エイミスは短編集 *Einstein's Monsters* (1987) のイントロダクションで書いている。「核兵器について考えると気分が悪くなる。核兵器について考えないと、理由は分からないがやはり気分が悪くなる。核兵器はあらゆる思考を拒絶する。核兵器はあらゆる思考を終わらせる。」エイミスも言うように、父キングスリーをはじめとするイギリスの作家たちは核というテーマを敬遠し沈黙を守ってきた。イギリス文学において、核兵器は長らくSF小説の中の出来事であったし、今でもそうである。核を語ることが一種のタブーであった60年代はじめの空気の中、前途有望な彼女の作家生命を脅かす可能性さえあったにもかかわらず、マードックは人々に声を上げるよう促し、核廃絶を訴えた。そのすぐれて知的で勇敢な行動に、心からの敬意を覚える。

と同時に、マードックの短い演説にヒロシマ・ナガサキが登場しないことに、日本人である私は少し物足りない気持ちを禁じえない。彼女は、核戦争の「恐ろしさ」や「極悪非道」さをイギリスの市井の人々が道徳的・政治的に糾弾することの大切さを唱えたが、どのようにそれが非道であるのか、なぜ核がとりわけ問題になるのか、その原点ともいうべき、多くの市井の日本人を殺した原爆については語らなかった。日本の文学や文化、東洋思想への造詣が深かったマードックは、この演説の13年後、1975年の2度目の来日時には広島を訪れている。彼女はそこで何を想っただろう。マードック理解のまだ浅い私は、演説原稿を前に、知性と勇氣の人・マードックとの距離が近いのか遠いのか、はかりかねている。

（青山学院大学准教授）